

研究開発実施報告書

1. 平成 27 年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要【別紙様式 5】

指定期間	ふりがな	がっこうほうじんけいめいがくいん けいめいがくいんちゅうがっこう・こうとうがっこう				②所在都道府県	兵庫県
27～31	①学校名	学校法人啓明学院 啓明学院中学校・高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	平成 31 年度の在籍者総数は左記の通り。	
	中学校	172	174	176	0		
高校普通科	245	255	244	0	744		
⑥研究開発構想名	ソーシャル・アントレプレナーシップを備えたグローバル・リーダーの育成						
⑦研究開発の概要	本校の教育の特色である価値観教育、野外教育、読書教育をベースに、SGHの研究では、社会的課題への関心を高め、深い教養と、問題解決力、コミュニケーション力を培い、ソーシャル・アントレプレナーの実践により自主性・協働性・多様性を身につけるカリキュラムおよび指導法を大学・各機関との連携により開発する。						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>アントレプレナーとは、起業家を意味する。しかし、この研究開発構想では、特にソーシャル・アントレプレナーに着眼し、「ソーシャル・アントレプレナーシップ」を身につけた人材育成に焦点を当てる。それは、世界市場で自己（自社）の利益追求のみをめざすような起業家的グローバル・リーダーではない。むしろ、公と民の間に立つ、公共の精神をもちつつ、世界がその解決を希求する深刻な社会的課題を、ビジネスで解決しようとするマインド（＝ソーシャル・アントレプレナーシップ）をもったグローバル・リーダー育成を目的とする。そしてそれを実現し得るカリキュラム、指導法の開発を軸に、そのスムーズな導入を促進する学内外の多面的な教育リソースの活用による特色ある教育システムの構築を目標とする。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>本校は関西学院大学継続教育校として、生徒の 95%が同大学に進学する。受験型教育でなく、リベラルアーツを大切に学習を進め、価値観教育、野外教育、読書教育、英語教育、国際交流、土曜講座、日本文化発信、ボランティアに重点を置いてきた。</p> <p>すでに、土曜講座における大学との連携授業を実施しており、読書教育を軸に論文をまとめる探究的な取り組みを行ってきた。</p> <p>今回の「ソーシャル・アントレプレナーシップ」のための研究開発に以下の仮説を立てた。a フィールドワークやビジネスプランなどの実践的な取り組みを経て、問題解決の過程において、自主性・協働性・多様性を身に付けることができる。b 文献研究をベースにした探究型学習で思考の基礎力が養われ、問題解決に役立つ。教員が教育ビジョンを高いレベルで共有するとともに、大学・各機関の専門家との連携を高めながら、「教える人」から自ら「ソーシャル・アントレプレナーの手本」となるようにする。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <p>①この研究実践を公開授業で、実践記録を研究発表会で中等教育関係者と共有する。</p> <p>②地域（阪神間、東播地区）の小中高に報告書を送付する。</p> <p>③生徒がメディアを通じて自らの体験と学びを公開・発信する。</p> <p>④生徒と教員が共同で保護者の会に成果を発表する。</p> <p>⑤関西学院大学と連携し、研究成果を同大学総合政策学部のリサーチフェアで発表する。</p> <p>⑥本校のホームページ等での広報活動を普及・拡大する。</p>					

<p style="text-align: center;">⑧- 2 課題 研究</p>	<p>(1) 課題研究内容 「ソーシャル・アントレプレナーシップ」を生徒が獲得するために、少人数ゼミでソーシャルビジネスに関する課題探究を行う。ゼミでは専門家よりソーシャルビジネスに関する「知識」を得るとともに、文献研究、情報検索、編集スキル、コミュニケーション、プレゼンテーションなどの「技能」も獲得する。これらの「知識・技能」を活用し思考力・判断力・表現力を高めるために『ビジネスプラン』を<u>全生徒</u>が策定する。 さらに国内外のフィールドワーク実践により主体性・多様性・協働性を身に付ける。国内では限界集落などの深刻な課題を、海外では東南アジアの環境問題、貧困問題を、現地の人々と連携することによって、世界に貢献したいという生徒の意欲を育む。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 科目「学術研究」を少人数ゼミ方式で実施する。文献研究の基礎を学び、上記の技能を<u>全生徒</u>が確実に身につける。大学生TAによる支援も行う。ビジネススキルをソーシャルビジネスの視点で応用できるよう、<u>連携する大学</u>や、機関の専門家の指導を受け「知識」を深め、それを土台に知識・技能を活用し、思考力、判断力、表現力を高め「学術研究」の成果として、自らがビジネスプランを策定する。さらにその成果を発表する場としてビジネスプランコンテストに参加し、第三者がその成果を検証する。また<u>英語によるビジネスプラン</u>の作成にも取り組む。帰国・外国人教員によるソーシャルビジネスに関する英語授業で、<u>英語によるビジネス・プレゼンテーション・スキル</u>を身に付ける。こうして海外コンテストへの応募が可能となり、国際レベルの成果が検証される。ソーシャルビジネスの起業や国内外でフィールドワークは、生徒の自主性を尊重し、グループの仲間や、現地の人々、専門家など多様な層の人々との協働が必要となるプログラムとする。この成果についても校内で発表し、大学・各機関などの第三者による検証・評価を行う。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 なし</p>
<p style="text-align: center;">⑧- 3 上記 以外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 教員は師弟同行を実践する。教員も生徒と同様に高い目標に向かってリスクを冒して挑戦し、さまざまな背景をもつ人々と協働し、その姿を生徒に見せることによって、ロールモデルの役割を果たす。検証評価は、教科別、学年別に教員が相互評価をする。学院理事会、保護者、卒業生などステークホルダーによる評価を受ける。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 なし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法 教職員の研修（FD）、海外の交流提携校との教員人事交流に加えて、国内外の教育研究者・実践者を招聘し、教員が自己研鑽を積む。</p>
<p style="text-align: center;">⑨ その他 特記事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アドバンスト・プレースメント（Advanced Placement）を導入する。APとは大学の授業を高校で開講し、大学の単位として認定する制度である。早期単位取得が可能となるので、このメリットを活かし、留学や関西学院大学のインターナショナルプログラムに積極的に参加することができ、同大学に継続的な教育を委ねることができる。 ・<u>継続大学（関西学院大学）</u>への校内推薦条件である英語力は英検2級を下限としている。現在2級取得者は卒業時に90%以上である。今後はTOEIC、TOEFL、IELTS、GTECなどの判定に堪えうる4技能の向上を目指す。 ・「学術研究レポート」（卒業研究）のアブストラクトを日英の2言語で併記する。 ・<u>高大連携人事交流</u> 高校教員と大学教員が相互に乗り入れ授業を行い、高校の教育の質を高める。 ・<u>関西学院専門職大学院経営戦略研究科（IBA）と共同研究</u>（本校より研究科に客員研究員を送る）をし、<u>同大学人間福祉学部社会起業学科とも連携</u>してフィールドワークをする。 ・ソーシャルビジネスNPOとの共同プロジェクトを推進する。 ・多様な生徒が数多く受験する帰国生入試、海外拠点入試をさらに前進させる。

啓明学院高等学校SGHプログラム

ソーシャル・アントレプレナーシップを備えた
グローバル・リーダーの育成

社会の深刻な課題をビジネスで解決しようとするグローバルリーダーに

スーパーグローバル大学(関西学院大学)国際プログラムなどへの参加

SGHプログラム

課題研究
「ソーシャル・アントレプレナーシップ」

【実践】
フィールドワーク

- ①国内(限界集落など)
- ②海外(東南アジアの環境・貧困)

【企画】
ビジネスプラン

「学術研究」(少人数ゼミ)

- ①文献研究の基礎
- ②情報検索・編集スキル
- ③課題発見力
- ④プレゼンテーション力

大学・研究機関との連携

スーパーグローバル大学
関西学院大学

- ①高大連携人事交流
- ②アドバンスト・プレースメント
- ③英語4技能と「学術研究」を評価する推薦入学
- ④教員、T/A派遣
- ⑤各種連携プログラム

京都大学

専門講師派遣

NPO法人
ブレンヒューマニティ
(国内外フィールドワーク)

一般社団法人
グローバル教育研究所
(地球村™)



啓明学院のこれまでの学び

Hands and hearts are trained to serve both man below and God above.

価値観教育
(建学の精神
キリスト教主義教育)

ボランティア活動

野外教育
(キャンプ)

読書教育
(中1~高1「読書」
高2・3「学術研究」)

土曜講座
(高大連携授業
リベラルアーツ)

日本文化
(日本文化の神髄を学ぶ)

英語教育
(英検2級以上取得)

国際交流
(姉妹校訪問
交換留学生)

5年間のふりかえり

SGH 指定5年間の研究開発をどのように進めてきたかをふりかえる。学校教育という惰性の強い制度における改革、とくにカリキュラム開発の組織風土改革への挑戦や突破口について述べ、今後の高校教育の改革に参考となる事例を提供したい。

1. 構想をどのように計画したか

(1) グローバル・リーダー像を描く

本学院は平成 27 年度 SGH の第 2 期公募で構想調書が採択された。平成 26 年度第 1 期に応募したが採択されなかったため、構想を初めから練り直しての再挑戦だった。「生徒の社会に対する関心と深い教養、コミュニケーション力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、もって、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図る」という構想概要の条件を、本学院の実態に即してあてはめていく作業から始めた。平成 26 年の 11 月～12 月にかけて有志のメンバーが集まり、本学院の教育についての議論を開始した。

① ビジネスリーダー志向か社会志向か

議論の焦点は、「どのようなグローバル・リーダーをイメージするか」だった。議論には2つのイメージがあった。第1は、グローバル化した世界をビジネスでリードするイメージである。国際競争で勝ち抜くようなリーダー像である。第2は、グローバル化した社会に生じる諸問題を解決するリーダー像である。問題が放置されがちな福祉や教育分野に目を向けるイメージだった。

第1のイメージは、それまでの教育再生実行会議の提言やスーパーグローバル大学（SGU）構想に産業界の危機感が反映されていたことを読み取った結果、生まれたものである。企業の国際競争力を高めるために、国際取引や交渉、商品・システム開発、グローバルチェーンの確立、財務管理、法務などを担当する人材をイメージした。

第2のイメージは、本校の建学の精神であるキリスト教主義に基づいて生まれたものである。世界のグローバル化が急速に進むときに、技術革新、経済的繁栄、平和で文化的な幸福に満ちた社会の実現から取り残される人たちがいる、そのような格差、社会的矛盾に立ち向かい、問題を解決することができるリーダーのイメージである。本校がある神戸市は、賀川豊彦（1888～1960年）が社会事業家として活躍した歴史もあるので、このようなイメージが教員の間で共有された。

② ソーシャルアントレプレナー

以上の2つのイメージが統合されたのは、平成 26 年 12 月に、私たちはアショカ（米国）の日本支部アショカジャパンの存在を知ったからである。ムハマド・ユヌス氏（グラミン銀行創設者）がアショカ・フェローであることを知って、「ソーシャルアントレプレナー」（社会起業家）という言葉は初めて聞いた。アショカは、優れたソーシャルアントレプレナー（社会起業家）をアショカ・フェローとして認証している。そしてアショカ・フェローは「目に見える課題の緩和ではなく、課題を生みだしている原因と構造そのものにアプローチし、これまでの世界にはなかった全く新しいソーシャルイノベーションによって喫緊の社会課題の根本的解決に取り組む個人と定義している。しかし、平成 26 年当時は、「ソーシャルアントレプレナー」という概念や用語は、学校現場では耳慣れないものだった。そこで『チェンジメーカー ～社会起業家が世の中を変える』（渡邊奈々、日経 BP、2005 年）、『社会起業家という仕事 チェンジメーカー 2』（渡邊奈々、日経 BP、2007 年）、『ムハマド・ユヌス自伝』（ムハマド・ユヌス、アラン・ジョリ、猪熊弘子訳、早川書房、1998 年）、『貧困のない世界を作る』（ムハマド・ユヌス、猪熊弘子訳、早川書房、2008 年）を読んで、社会課題をビジネスの手法で解決していく考え方や実践例を理解していった。本校は関西学院大学の継続校（卒業生の 95%が進学）であるので、スーパーグローバル大学（SGU）に指定されていた関西学院大学の動きも視

野に入れ、高大連携を意識した。こうして本校の SGH 構想の核となる「ソーシャルアントレプレナーシップを備えたグローバル・リーダー」というコンセプトが誕生した。

③ ソーシャルアントレプレナーシップとソーシャルアントレプレナー

「ソーシャルアントレプレナーになること」でなく、「ソーシャルアントレプレナーシップを備えた」としていているところに私たちのこだわりがある。どんな職業に就いていても、どんな現場にいても、新しいソーシャルイノベーションによって社会課題の根本的解決に取り組もうとする精神、マインドを高校生のうち育てたい、専門知識や技術は大学進学後に身に付けてほしいという願いが込められている。

(2) SGH プログラムを選抜制、コース制にしなかった理由

本校で SGH プログラムの対象者を絞らなかった。理由は2つある。

第1に、教育は種をまくことであると考えたからだ。高校入学時に、将来、グローバル・リーダーになりたい、または自覚的にソーシャルアントレプレナーシップを身に付けたいと思ってコースを選択する中学生がどれだけいるだろうか。思春期の生徒の成長のプロセスは多様である。学校で生徒は知識を吸収し、人と出会い、様々な実体験を通じて、喜び、達成し、悩み、議論し、考えることによって成長していく。成長のきっかけも、速度も、成長が加速する時期も1人ひとり違っている。だから、高校入学の15歳の時点で、学ぶ本人も、育む教員にも、その生徒の可能性がどれだけあるのかは、わからない。このように考えて、全員に3年間、学ぶ機会を提供すべきだと考えた。

第2に、生徒、教委職員の分断を回避したかったからだ。仮に SGH コースとそうでないコースに分かれて、同じキャンパスで生徒が学んだとしたら、何が起こるだろうか。SGH コースを選ばなかった生徒は、SGH プログラムへの無関心、グローバル化した世界で生きていく将来に対する諦め、無力感などを覚え、SGH コースの生徒に対する嫉妬と偏見などを生むことにはならないか。SGH コースには人、金、もの、情報などの教育資源が特別に投入されることになるのだから、コース外の生徒には機会の平等はなくなる。そうすると高校が、生徒も教職員も分断されてしまうのではないかということを私たちは恐れたのである。

(3) 教育資源の発掘、確保

カリキュラム開発のための、人的資源、財政的資源、時間的資源をどう生みだしていくかが課題だった。

まず人的資源をどう確保するか。新しい教育を学校現場の教員だけで創っていくのは無理があるので、企業、NPO、NGO、大学などから外部人材を招いて、ノウハウを高校教員に採り入れる必要があると考えた。

次に、財政的に気をつけたことは、SGH 指定期間が終わった後に自力で継続し、発展させていけるようにするにはどうしたらよいか、ということである。さまざまな教育機関で、研究開発委託事業や補助事業の資金がなくなったとたんに事業が中断するというのを聞いていたからだ。とくに海外フィールドワークの実施にあたって、SGH 予算で参加費を補助するのは、立ち上げのときに限定すべきだという管理機関（啓明学院理事会）の意向があった。最後に時間を生み出すことである。学校現場で教員は多忙である。世界で最も忙しいのは日本の教員だとも言われている。学級経営、教科指導、学校行事の運営、生活指導、進路指導、部活動の指導、保護者とのコミュニケーション、教職員の会議など、広範囲の業務を、1人の教員が同時にこなさなければならない現実がある。SGH プログラムを全生徒対象にしている以上、全教員がかかわることになる。これが大きな課題であった。プログラムの実施にあたっては、運営のための教員用ガイドブック、教材の開発、周知を SGH 推進室が支えることにした。

(4) SGH 推進体制

SGH 事業を推進するための組織は、以下の通りである。

SGH 推進室	櫻間 敏夫(SGH 担当副校長)、指宿 力(広報担当副校長)、長尾ひろみ(SGH アドバイザー) 佐藤 知行(SGH 推進室長)、嶺坂 尚(SGH 推進室次長) 松田 大輔(啓明学院事務室長)、高山 卓也(啓明学院事務室次長)、北阪 紀子(事務職員)			
SGH 推進委員会	中学/スタッフ	高 1	高 2	高 3
	後藤 直哉 (教務部長・社会科) 中野 力(社会科) 長久 善樹(社会科)	前田 慧一郎 (数学科)	Dunk Steven (英語科)	斉藤 利枝(英語科) 前田 聖廉(数学科) 小堀 浩子(理科) 中西 祐介(体育科)
SGH 運営 指導委員会	黒田 愛(弁護士、久保井総合法律事務所) 櫻間 裕章(神戸新聞執行役員論説委員長) 武田 寿子(NPO 法人スペシャルオリンピックス日本・兵庫理事長) 水野 雄二(社会福祉法人 神戸聖隷福祉事業団理事長)			

第 1 回 SGH 運営指導委員会 令和元年 12 月 13 日
 ソーシャルビジネスプランの作成方法、指導方法について
 フィールドワーク経験とソーシャルビジネスプランの作成の関連について
 大学進学後の卒業生のソーシャルアントレプレナーシップの発揮について

第 2 回 SGH 運営指導委員会 令和 2 年 2 月 5 日
 「学術研究」と社会課題の分析について
 研究の内容と発表方法の指導について
 発表会でよい聴衆の育て方について

2. カリキュラム開発

SGH 中間評価では、3つの課題を指摘された。第1に、研究テーマに沿ったカリキュラム上の位置づけが不透明であること。第2に、ソーシャルビジネスプラン作成とフィールドワークによる検証が具体的に見えないこと。第3に、「学術研究」の取組によりソーシャル・アントレプレナーシップを備えたグローバルリーダーが育っていることの説明が不十分であることである。この指摘を受けて、SGH 5年目までに改善したことを以下に述べる。

(1) カリキュラム上の位置づけ

総合的な学習の時間で、1～3年生を対象にソーシャルビジネスプランの作成、外部講師による講演会、2年生を対象にフィールドワークの実施、学校設定科目「学術研究」で文献研究によるレポート作成法の学習を位置づけた。

カリキュラム

科目名		総合的な学習の時間		
3年	「学術研究」＊ 1単位	ビジネス プラン	講演会 (グローバルな社会課題) (ソーシャルアントレプレナーシップ)	
2年	「学術研究」＊ 1単位			海外フィールドワーク (シンガポール)
1年				

*英語による開講 2グループ

(2) ソーシャルビジネスプラン作成とフィールドワークによる検証

① ソーシャルビジネスプラン

ソーシャルビジネスプランの作成を通して、社会課題の発見とビジネスで解決する方法を学んでいる。校内で独自のビジネスプランコンテストを創設した。講師と審査員は、学識経験者、NPO、NGO 関係者、企業の経営者、コンサルタントなどを含む専門家に依頼した。NPO 法人ブレインヒューマンティの協力を得て教材を開発した。「ソーシャルビジネスプラン作成の手引き」とビジネスプランコンテスト運営のための教員用ガイドを開発した。学習方法は、個人または3人までのチームでのプロジェクト学習である。

	学習内容	講師
3年生	ソーシャルビジネス、ソーシャルアントレプレナーの事例研究	高尾正樹氏（日本環境設計（株）） リサイクルビジネス 古着からバイオエタノール精製 携帯電話の貴金属からオリンピックのメダルを作る 竹下友里絵氏（タベモノガタリ（株）） 規格外野菜の販売でフードロスの削減
2年生	社会課題を解決した理想の状態 予防的事業なのか対策的事業なのか 経費、システム	能島裕介氏（尼崎市市役所、NPO 法人ブレインヒューマンティ顧問）
1年生	社会課題とは何か、課題の見つけ方 社会課題の発生要因、継続要因 SDG s	福井邦晃氏（NPO 法人ブレインヒューマンティ） 社会教育福祉事業

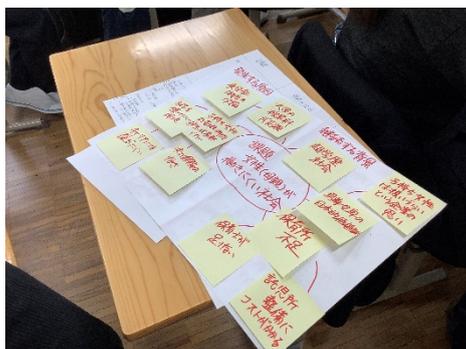
3年生は、事例研究として、ソーシャルアントレプレナーを招聘して、話を聴くことにしている。実務家の話は提案、疑問は経験に裏づけられ、説得力がある。実務家はできるだけ若い方を選んでいる。高名な、権威ある人が話し手も、生徒の心には響きにくい。自分とは遠い存在、完成した存在と感じてしまうのかもしれない。近い世代で、同時代の空気を吸って格闘している方々の話を生徒は目を輝かせて聴く。また学生時代に悩んだ人の話もよく聴く。このような講師の話は、これから大学で学ぶ意味を生徒に考えさせてくれるからである。

② ソーシャルビジネスプラン特別講座の開講

平成30年度から特別講座「ソーシャルビジネスプラン企画塾」を開講している。

1学期、2学期の土曜日（隔週） 全14回 1回あたり90分。
受講者13名。希望者。1～3年生。

この講座は、ソーシャルビジネスをさらに深く学びたいという意欲を持った生徒向けである。講座内容は、社会課題の定義・背景・発生要因・継続要因、社会課題を解決すべき主体、ソーシャルビジネスの分野、ビジネスの仕組みなどである。様々な先行事例を参考にして、講義、議論、プラン作成などを行う、ワークショップ形式で学んでいる。



③フィールドワーク

2年生の総合的な学習の時間で、海外フィールドワークを全員に実施している。シンガポール、マレーシアへの修学旅行の一部に組み込んでいる。異文化理解をテーマにして学習する。グローバルな社会課題を発見し、解決するためには、その地域の文化理解が欠かせないからだ。日本の文化とは異なる文化があること、異文化とは何かを考える機会にしている。学習方法は6人程度のチームでのプロジェクト学習である。「異文化」と感じられる物、風景、人々の様子を個人で写真撮影する。写真を持ち寄って、なぜその場面を切り取ったのか議論し、共有する。このようにして自身が抱えている文化的フィルターに気がついていく。1年生は、高校からの入学生を対象に総合的な探究の時間（令和元年度より設定）の時間を使って、京都でフィールドワークを行っている。国際観光都市としてSDGsを生かしたまちづくりがどのように行われているかを調査、報告する内容となっている。希望者には課外活動の海外フィールドワーク、海外交流プログラムが用意されている。これらのプログラムには、日本文化の紹介、ホームステイ、スポーツ交流などが含まれ、日本文化の理解と英語による発信力が鍛えられている。詳細は以下の通りである。

	総合的な学習の時間 シンガポール・マレーシア 異文化体感フォト コンテスト	総合的な探究 の時間「読書」 京都 SDGs と まちづくり	課外活動としてのフィールドワーク、海外交流（希望者）				
			ミャンマー スタディーツアー ソーシャルビジネス の現場訪問	マレーシア ワークキャンプ 異文化、ソシヤ ルビジネスの理解	インド交流 プログラム 異文化理解 ※	英国国際交流研修 (ロンドン大学) 語学研修、異文 化理解 ※	University Preparatory Academy 訪問 (米国シアトル) 異文化理解 ※
3年生	—	—	○	○	○	—	—
2年生	○	—	○	○	○	○	○
1年生	—	○	○	○	○	△	○

※はSGH事業計画には入っていないが、SGH指定以前から継続実施しているもの。

④ソーシャルビジネスプラン作成と海外フィールドワークとの関連

ア 全員必修型では異文化理解の視点を養い社会課題に挑む基礎力をつける。

全員必修型のシンガポール・マレーシアでの異文化理解を通して、欧米に目が向きがちな日本の高校生にアジアへの関心を高めることを目的としている。対照的な2か国、高度な経済発展を遂げたシンガポールと開発途上のマレーシアを同時に訪れることによって、異文化理解と経済発展について考える機会を設けている。

イ 希望者型は2段階でソーシャルビジネスにアプローチする。希望者対象のフィールドワークは、2つの段階のものを用意している。

マレーシアワークキャンプは、NPO ブレーンヒューマニティが実施する研修である。植林活動、農村の家庭にホームステイすることによる交流と異文化理解を通して、教育・福祉、医療、インフラ整備、環境問題と経済発展などの社会課題に気づく機会を提供している。1週間程度という参加日程、全国の中学校・高校から同世代が参加するという刺激があること、農村部でホームステイをするという安心感、現地の子どもたちとの交流事業が組み込まれているなど、参加しやすい条件がそろっている。

ミャンマースタディーツアーは参加のハードルが比較的高い。現地で活躍するソーシャルアントレプレナー林健太郎氏（ベアフットドクターズグループ代表）の実践を学ぶことを目的にしているため、ソーシャルビジネスプランの作成に直接関連する。現地でのソーシャルビジネスを見て、ミャンマーYMCAを通じて現地の大学生と現地の社会課題とその背景について議論していく。

マレーシアワークキャンプとミャンマースタディーツアーの違いは、海外フィールドワークの初心者向けか中級者向けかということがいえる。学習内容の重点は、社会課題の発見（マレーシア）と社会課題の解決（ミャンマー）と色分けされる。

ウ SGH 指定以前から継続している海外研修の影響

インド交流プログラムは、本校と現地校の学校間協定に基づくもので、ブルーベルズスクールインターナショナル校（デリー）、グジャラートパブリックスクールとの交流およびホームステイ、インドの名所タージマハルや貧困地域の訪問などがプログラムになっている。ホームステイ先は非常に裕福な家庭と中流の家庭の両方を含む。経済格差、文化的な違いなどインド社会の多様性を知る機会となっている。マレーシアワークキャンプよりもインド交流プログラムで生徒が受ける衝撃は大きい。食事の種類、量、回数、生活の時間、宗教と生活、都市部の物質的な豊かさ、都市部にも郊外にもある貧困の実態、環境汚染などを学校間の交流プログラムや福祉施設訪問、宿泊、移動、観光などを通して多角的、多面的に学んでいく。こうして経済、教育、福祉、環境などの日本とは異なる社会課題に生徒は気づいていく。

米国、英国を訪問する海外交流プログラムは語学研修の要素が強く、社会課題を発見するような機会は盛り込まれていない。しかし学校訪問やホームステイなどを通じて、食生活、環境問題、テクノロジーの発達、文化的多様性と共生など先進国、移民大国ならではの社会的テーマを学んでいる。

エ 学習成果

アジアのフィールドワークに参加した生徒が、その体験をもとにして、ソーシャルビジネスプランを作成している。令和元年度（SGH 指定5年目）には、ミャンマースタディーツアーに参加した生徒がミャンマーで展開するソーシャルビジネスプランを作成し、校内ビジネスプランコンテストで最優秀賞に選ばれている。

また過去3年間にミャンマースタディーツアーに参加した生徒（10名）が自発的にプロジェクトを実行した。9月～11月にかけてミャンマー八角平和計画支援プロジェクトを展開し、文化祭でオリジナル商品を販売して収益を現地に還元した。



ミャンマー八角平和計画支援の商品開発 9月



プロジェクトチームは16人 9～10月



文化祭での商品販売 11月



売り上げ利益3万円を還元 11月

オ 英語発信力強化の授業

グローバルリーダーに求められる重要な能力に英語によるプレゼンテーションや交渉力がある。SGH指定2年目の平成28年度に、英語での授業や発表の充実の方針が文部科学省から示された。本学院では、平成29年度より英語科でのスピーチコンテストの内容、指導法を見直し、平成30年度より以下のような取り組みをしている。

英語 スピーチコンテスト、ディベートコンテスト

	科目名 (単位数)	テーマ	学習方法
2年生 252名	コミュニケーション英語 (4)	現代社会の課題や異文化理解に関するトピック	3~4人1組でのディベート
1年生 245名	英語会話 (2)	グローバルな社会課題とその背景は何か	2人1組でのプレゼンテーション

学習スタイルはプロジェクト学習である。

ネイティブスピーカーを含む英語科教員1名で1クラス40人強、6クラスを指導している。教員1人あたりの生徒数が非常に多いため、個人指導は難しい。そこで、チームを編成し、語るトピックの選定、英作文、パワーポイントの活用などをワークシートを使って授業を進めている。生徒相互のフィードバックやふりかえりを行わせ、自学自習ができるように指導している。要所で教員による添削指導も行っている。

この授業の内容が変わったことによって、ソーシャルビジネスプランやフィールドワークのプレゼンテーションを英語で行うことに抵抗がなくなった。また学校設定科目「学術研究」に英語で取り組む生徒が毎年5人以上に定着した。海外短期留学や海外研修への参加の促進にも役立っている。

⑤ビジネスプランコンテストの課題

ア 3年間行うことの意味

コンテスト上位入賞者の3年生は、高校生活をふりかえって、1年生のときにはソーシャルビジネスを理解するのは難しかったが、3年間行うことによってだんだん理解できるようになったという。継続的に行う意義はある。3年間で必修のフィールドワークをおこない、希望者は海外フィールドワークの経験をふまえてソーシャルビジネスプランの作成に取り組めるメリットがある。

イ 他の学習、部活動との両立、時間確保

3年間行うことのメリットも感じる一方で、2年生には秋の海外修学旅行に向けての事前学習、3年生には卒業、進路選択に向けてのキャリア学習などがあり、ビジネスプランコンテストに費やす時間が負担になっている。

(3) 学校設定科目「学術研究」とソーシャルアントレプレナーシップ育成との関連

「学術研究」は、文献研究の基礎を学ぶ科目である。情報収集、情報分析、レポート作成方法を学び、大学教育を受けるにふさわしい情報リテラシーを身に付けることを目指す。ソーシャルアントレプレナーシップを発揮するには、社会課題の分析する力が問われる。社会課題の分析には、多種多様な情報を収集し、分析する力、すなわち情報リテラシーが重要である。

そこで、この科目は、ソーシャルビジネスプランを作成する、フィールドワークで学んだことを整理する、課題について議論する、プレゼンテーションをするなど、全ての領域の基礎学力を養うものと位置づけている。この授業は、2年生、3年生に、週1時間配当している。SGH指定4年目からは、「学術研究」のレポート作成で、個人研究テーマを探究するときにSDGsとの関連を意識させるようにした。



「学術研究」

グループとは「学術研究」19講座のグループを指す

学年 (単位)	1 学期	2 学期	3 学期
3 年生 (1 単位)	4 月 3 年次のオリエンテーション 5 月 文献検索、研究計画の修正、レポート執筆 6 月 グループ内中間発表 相互批評 7 月 SDGs 関連講演を聴講	9 月 レポート執筆・修正 11 月 グループ内最終報告 レポート提出 研究テーマと SDGs (生徒自身による関連付け)	1 月 「学術研究」発表会選考会 (グループ代表生徒の相互評価、SDGs 関連) 2 月 「学術研究」発表会 口頭発表 1 4 題 口頭発表 2 15 題
2 年生 (1 単位)	4 月 2 年次のオリエンテーション 文献の分析読書 (精読、教員主導) 7 月 SDGs 関連講演を聴講	文献の分析読書 (精読、生徒主導へ 発表、討論など)	1 月 3 年次の研究テーマ探索 2 月 2 年次のレポート提出 (精読のまとめ:個人) 「学術研究」発表会を聴講 3 月 3 年次に向けての オリエンテーション
1 年生 科目 「社会と情報 B」 (1 単位)	7 月 SDGs 関連講演を聴講	10 月 2 年次「学術研究」の 開設講座発表 11 月 2 年次「学術研究」の エントリーシートを提出	2 月 2 年次に向けてのオリエンテーション (3 年生による) 「学術研究」発表会を聴講 3 月 次年度「学術研究」 グループ決定

オリエンテーションのスライド例 (2 年生対象 : 3 年次に向けて) 3 月 1 2 日 (火) 11:35~12:20

I. テーマ【主題】は、きまった？

- ▶ A. 「テーマにならない例」でないか
をチェック！

わかり
きってる

大きすぎ
／広すぎ

結論が
よめない

ハウツー

専門すぎ

- ▶ B. 「成長 (修正) 」をおそれるな！
- ▶ C. その研究の「意義」を考えよう！

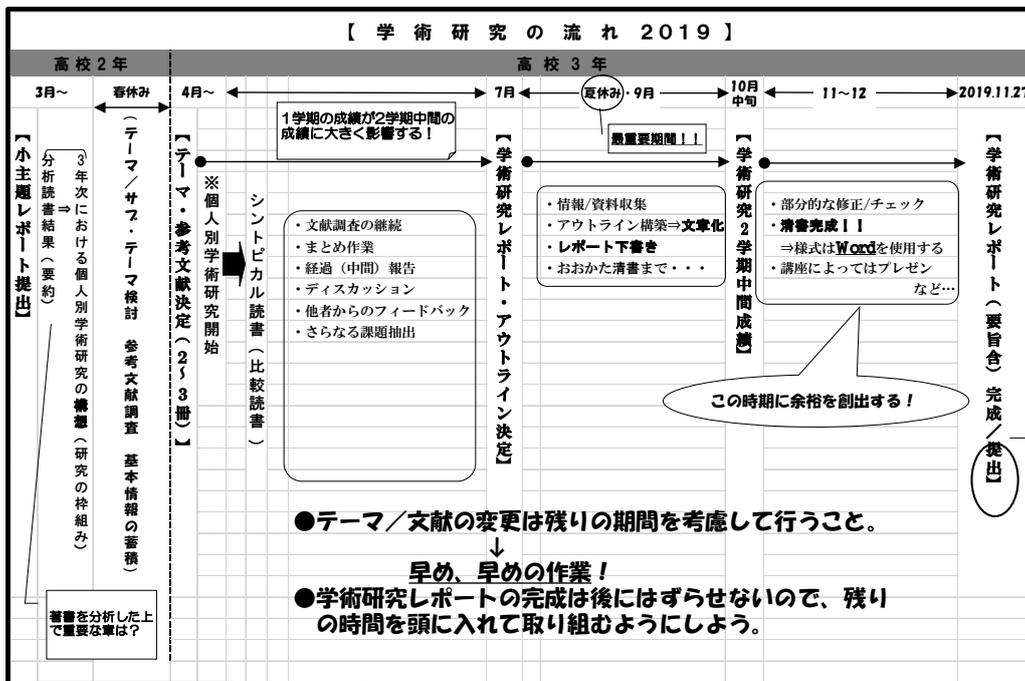
II. サブ・テーマや仮説は考えた？

- ▶ とにかく、自分だけで考えない！

言葉の定義を
徹底的に調べる

➡

①辞典
②百科事典
③専門事典



3. 全員で学ぶ方式が生徒に与えた影響

(1) 英語 4 技能

本学院では高校卒業時まで、CEFER の B1～B2 レベルに相当する実用英語検定 2 級以上の取得を目指している。それは継続校である関西学院大学への推薦条件になっているためでもある。

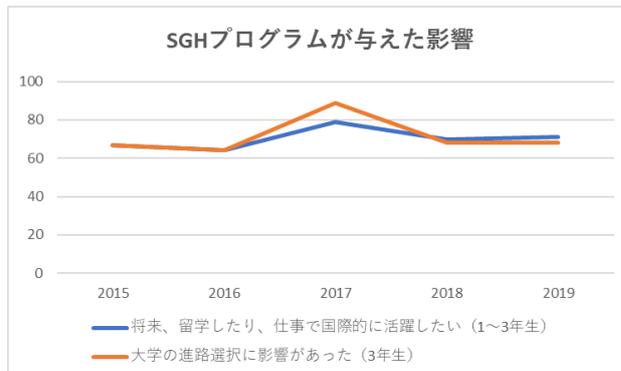
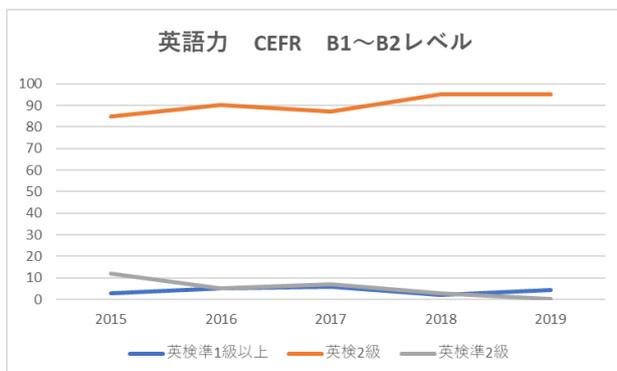
SGH指定初年度の3年生は、取得率が88%、5年目は99.5%である。SGH123校の平均46%（筑波大学SGH研究班、2019年）と比べて2倍である。

英語力の高い生徒が入学しているからではないかという指摘があるが、それはあてはまらない。入学時には、英検3級は全員取得しているが、英検2級の取得者は10%程度である。したがって、英語4技能の能力は、高校生活で身に付けたものである。

授業は42人程度のクラスに教師1名、教員人数の加配はしていない。英検対策の授業も行っていない。英検2級以上の取得率が高いのは、生徒の努力と教員の工夫の賜物である。

SGH指定期間に取得率が10%以上向上し、100%に近づいたことは、英語に苦手意識を持っている層の力がついたことを示しているからである。英語はできる人がやればよい、やりたい人がやればよいではなくて、全員で学ぶことの成果がここに表れている。

SGH指定以後は、グローバル・リーダー像が明確になったこと、英語での発信の機会が充実したので、英語を学ぶ必要性を生徒が自覚したと考えられる。



(2) 大学進学への進路選択や国際志向にSGHプログラムが与えた影響

本学院のデータは、5年間の平均が68%である。SGH123校のうち、コース制または希望者対象にSGHプログラムを実施している学校の平均60%と比べて遜色がない（筑波大学研究班、2019年）。選抜された生徒が、大学進路とSGHを関連づけるのは当然である。それは高校入学時点で自覚的に学ぶ準備ができていたからだ。また、将来、留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考えている生徒の割合は、5年間の平均が70%である。

このように見ると、本学院の生徒は、入学時の生徒個人の自覚的な選択がなくても、学ぶ風土が整っていれば、相互に啓発して学習が進んでいくことを示しているのではないかと。

(3) 探究型学習とプレゼンテーション意欲への影響

「学術研究」発表会の口頭発表2では、15の発表から2つを選択して聴くことができる。環境は、会場が教室で、聴衆の人数は10～50人と比較的少人数、2年生と3年生が混ざっているという特徴がある。

発表者は3年生で、2年間かけて研究した成果をパワーポイントを使って披露する。令和元年度より、高校の全教室にプロジェクターが設置され、WiFi環境が整ったこと、1、2年生は全員がiPadを持つことになった、という学習環境の変化がある。3年生はiPadを持っていないので、学校にあるノートPCを発表者に貸し出している。

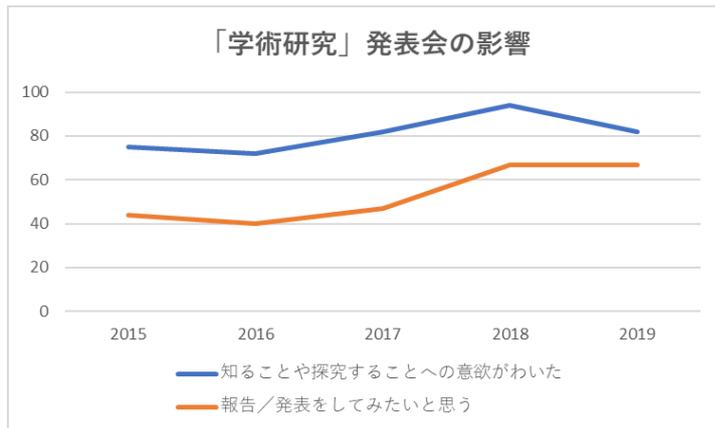
平成30年度までは、ポスター発表形式だったので、プレゼンテーションの内容が大きく変化

している。スライドデザインの工夫、画像の多用、アニメーション機能の使用など、模造紙を使ったポスター発表時代にはできなかったことに取り組んでいる。

また教員が学会発表に近い発表会の形式、運営に慣れてきたことが感じられる。

口頭発表1では、4人の生徒が発表する。発表会1か月に全講座の代表者19名が集まってプレゼンテーションの予選会を行い、生徒同士の相互評価によって代表を選ぶというプロセスを踏んでいる。この機会を通してSDGsのゴールと自身の研究テーマについて意見を交換している。4題の発表を選ぶ際には、「学術研究」の開設講座の人文科学系から2題、社会科学系から1題、自然科学系から1題というバランスにしている。こうして、3年生の研究で最も優れた発表を聴くチャンスが、1年生から3年生まで全員に提供される。

1年生はこの口頭発表1だけを聴き、2年生は口頭発表1と2の両方を聴いて、次年度「学術研究」に取り組むモチベーションを上げている。このことは、1、2年生を対象にした調査結果にも表れている。



口頭発表2 少人数でのセッション 2月5日



口頭発表1 全体会での発表 2月5日



口頭発表1 1～3年生全員で共有



予選会 全体会の発表者を決める 1月8日



予選会 生徒同士の相互評価で代表を選出

4 調査研究 在校生、卒業生、教員への影響（質的研究）

SGHプログラムが与えた影響を質的に検証するために京都大学大学院の服部憲児准教授に調査への協力をお願いした。本学院の教員にフィードバックされた。この研究結果の暫定版は、令和元年11月に日本教育制度学会で発表された。以下、研究報告を掲載する。

SGH の成果に関する質的研究のフィードバック

服部憲児（京都大学大学院教育学研究科）

2020年2月

はじめに

SGH の成果に関する質的研究におきましては、啓明学院高等学校の教職員、生徒、卒業生の皆様に多大なる御協力をいただき、心より感謝申し上げます。遅くなりましたが、そして不完全な状態ではありますが、以下に研究のフィードバックを行いたいと思います。

I. 研究の概要

1. 研究目的

SGH 公募要領における目的・目標は数値化することを基本とされている。しかしながら、その成果は数値化できるものだけにとどまらないことは言うまでもない。本研究は、質的分析方法を用いてそのような成果を明らかにし、SGH の教育成果を多角的・複眼的に示すことを目的とする。例えば、生徒たち学習の習慣・スタイル・型の形成、成功体験によるその強化、SGH に関わることによる教員の資質・力量の向上、意識の変化などが、質的にしか示し得ない成果として想定される。

2. 研究方法

関係する生徒・教員に対する半構造化インタビューを実施し、その結果を M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）の手法を援用して分析する。インタビュー調査の実施概要は下記の通りである。

- ・調査日：2018年12月8・11・14日、2019年1月11・25・29日、2月13日、3月6日
- ・場所：啓明学院高等学校
- ・調査対象者：教職員26名、生徒（当時）22名、卒業生12名

上記インタビューにおいて聞き取った録音データの文字おこしを行い、M-GTA の手法に基づき概念（発話内容の趣旨・要点）を抽出し、グループ化してカテゴリー（関連する概念の集まり）およびサブ・カテゴリー（概念とカテゴリーの中間に位置する概念の集まり）を作成した。それらの関連性を確認しながら概念図（概念やカテゴリーの関連性を図示したもの）とストーリーライン（全体構造の説明）を作成した。

II. 生徒調査

1. 生徒に対する主な質問項目

生徒（当時を含む）に対する主な質問項目は以下の通りである。

- ・SGH の何が面白い（場合によっては面白くない）か。SGH プログラムから何か学んだことはあるか。受けた影響はあるか。それはどのようなものか。
- ・高校に入ってから身についたと思うことはあるか。
- ・どのような勉強の仕方をしているか。何か工夫をしているか（AL 型学習スタイルの習得状況を含む）。SGH 関係の学習と受験勉強との両立はどのようにしているか。
- ・関心のあることは何か。学校の勉強・受験勉強以外に何かしているか。それはいつ頃からか。
- ・将来はどのようになりたいか（進学、職業など）。

2. 抽出された概念とその定義

生徒の発話からは以下の 23 の概念が抽出された（※欠番があるのは分析の過程で成立しなかったものが有るためである）。概念名とその定義は以下の通りである。

	概念名	概念の定義
概念1	外国に行く機会	外国に行ける機会があることを評価する。
概念2	様々な機会がある	様々な機会があることが良い。
概念4	行ってみて分かること	実際に現地に行って初めて分かること／行かないと分からないことがある。
概念5	将来への準備	将来やりたいことの関係で活動を捉える。
概念6	考える／動く機会・きっかけ	考えたり、行動したりする機会やきっかけがあった。
概念7	関心を持つ	活動することによって関心を持つようになる。
概念8	将来への影響	進学先の選定や将来の方向性や在り方に影響があった。
概念9	視野の拡大	活動や高校生活を通して視野が広がった。
概念10	他者からの刺激	他者と接することで刺激を受けた。
概念11	リピート希望	もう一度参加してみたい。
概念12	問題解決へとつなげる	見聞したり、調べたことを元に問題解決を考える。
概念13	自分で調べる	興味のあることを自分で調べる。
概念14	思考力の深まり	考えが深まった。
概念15	大学で有効	大学生になった時にプラスになる。
概念16	知識・技能の獲得	知識や技能をえることができた。
概念18	難しさへの気づき	難しいということに気がついた。
概念19	交流の継続	現地で会った人と交流を続けている。
概念20	意見交換の機会	意見交換の機会があり、そこから学ぶことができる。
概念21	リーダーシップの獲得	活動を通してリーダーシップが身についた。
概念23	アドバイスにより成長	アドバイスをもらったことにより、様々なことが身についた。
概念24	成功体験	良い経験をしたと感じた。
概念25	異文化理解	異質な物・異文化を受け止める力が付いた。
概念26	日常生活への影響	活動が日常生活に影響を与えた。

3. カテゴリーおよびサブ・カテゴリー

概念の内容および相互の関連性を吟味した結果、5つのカテゴリーと3つのサブ・カテゴリーが生成された。各カテゴリーの説明は以下の通りである。なお、【 】はカテゴリー名、概念名概念の定義< >はサブ・カテゴリー名、「 」は概念名を表している。

(1) 【機会】

生徒たちは、多様な学びの【機会】、すなわち「外国に行く機会」や「様々な機会がある」ことを好意的に捉えている。

(2) 【他者との関わりによる成長】

生徒たちは、多様な学びの【機会】の中で、「意見交換の機会」を持ったり、「他者からの刺激」を受けたり、他者からの「アドバイスにより成長」したりしている。その後「交流の継続」をしている者もいる。これらを通して教員、生徒同士、外部人材などの【他者との関わりによる成長】を実感している。

(3) 【関心】

生徒たちには、学びの【機会】の中で、「行ってみて分かること」が多い。それが「考える／動く機会・きっかけ」になったり、「関心を持つ」ことにつながったりしている。活動の「リピート希望」を持つ者もいる。かくして生徒たちは、様々な事柄に【関心】を強く持つに至っている。

(4) 【成長・変容の実感】

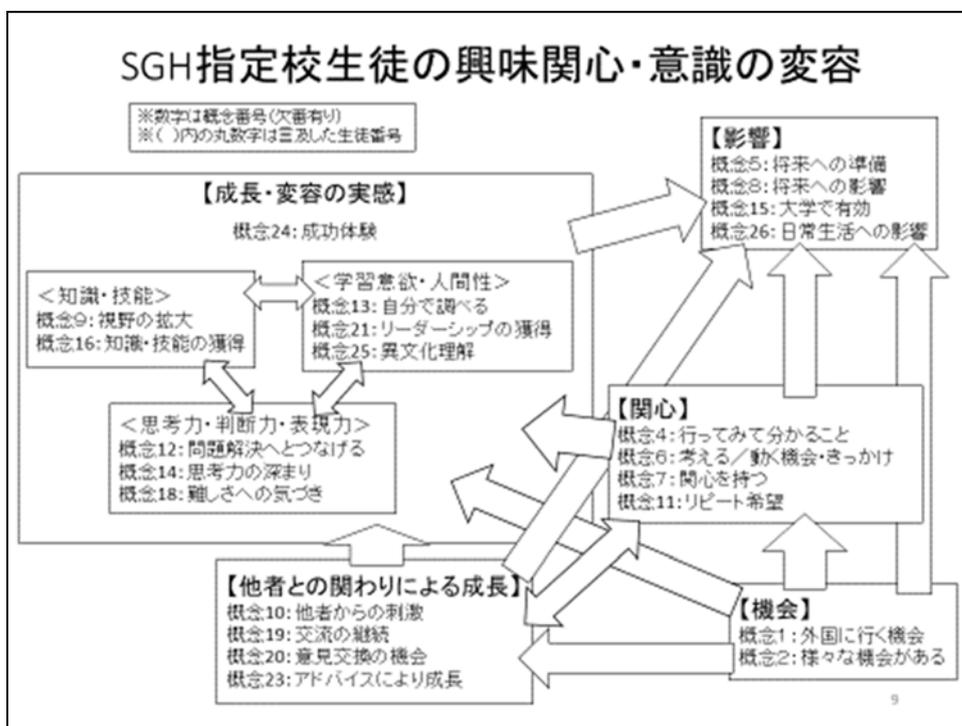
生徒たちは、多様な学びの【機会】の中で様々な経験をするにより、自らの【成長・変容の実感】をしている。その内容は、＜知識・技能＞の習得（「視野の拡大」、「知識・技能の獲得」）、＜学習意欲・人間性＞の向上（「自分で調べる」力の獲得、「リーダーシップの獲得」、「異文化理解」の深化）、＜思考力・判断力・表現力＞の獲得（「問題解決へとつなげる」力の獲得、「思考力の深まり」、「難しさへの気づき」）にわたり、学力の諸要素のバランスが取れたものとなっている。また「成功体験」も持つことができている。

(5) 【影響】

生徒たちは、多様な学びの【機会】の中で様々な経験をし、【関心】を持ったり、成長したりしている。これらの諸経験が生徒たちに様々な【影響】をもたらしている。それは「大学で有効」なことの獲得であったり、「将来への準備」につながったりしている。また、「将来への影響」だけでなく、「日常生活への影響」もある。

4. 概念図およびストーリーライン (SGH 指定校生徒の興味関心・意識の変容)

上述のカテゴリー、サブ・カテゴリー、概念を内容の近接性や関連性を考慮しながら図式化すると、下図（概念図）のようになる。



この概念図を説明するストーリーラインは以下の通りである。

- ・SGH に指定され、海外での学習や探究型学習など、啓明学院には様々な機会が存在している。
- ・生徒たちは、そのような機会に触れることで、興味関心を持ったり、深く考えたりするようになる。
- ・生徒たちは成長や変容を実感しており、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学習意欲・人間性も身についたと認識している。
- ・他者との関わりから、生徒たちにそのような成長が生じている面もある。
- ・さらに、機会を活かして学ぶことにより、進路や学習方法など、生徒たちの将来や日常生活に変化が生じている。

Ⅲ. 卒業生調査

1. 卒業生に対する主な質問項目

卒業生に対する主な質問項目は以下の通りである。基本的に生徒に対するものと同内容である。

- ・SGH の何が面白かった（場合によっては面白くなかった）か。SGH プログラムから何か学んだことはあるか。受けた影響はあるか。それはどのようなものか。
- ・高校時代に身についたと思うことはあるか。
- ・どのような勉強の仕方をしてきたか。何か工夫をしていたか（AL 型学習スタイルの習得状況を含む）。SGH 関係の学習と受験勉強との両立はどのようにしていたか。
- ・関心のあることは何か。大学の勉強以外に何かしているか。それはいつ頃からか。
- ・将来はどのようになりたいか（進学、職業など）。

2. 抽出された概念とその定義

卒業生の発話からは以下の 16 の概念が抽出された（※欠番があるのは分析の過程で成立しなかったものが有るためである）。概念名とその定義は以下の通りである。

	概念名	概念の定義
概念1	活動の楽しさ	人との関わり合いや交流が楽しかった。
概念2	大学への繋がり	高校時代の勉強や経験が、大学での学業等に繋がっている。
概念5	学び方を学ぶ	自分で調べたり学んだりする方法を学んだ。
概念6	伝え方を考える	どう伝えるかを意識してプレゼンを考える。
概念9	主体性の獲得	高校時代に、または高校時代の経験から主体性が身についた。
概念10	高校生には難しい	今（大学生）なら分かるが、高校生には難しく、あまり理解できなかった。
概念11	未来への影響	高校時代の活動がその後に影響した。
概念12	他者との関わりから学ぶ	他者と関わることによって学ぶことがあった。
概念14	自校の良さ	他の学校ではできないこと、自校の良さを感じる。
概念16	知らなかったことを学ぶ	活動を通して、今まで知らなかった新しいことを知った。
概念17	技術の習得	学習を通して様々な技術が身についた。
概念18	自信がついた	経験することによって自信がついた。
概念19	先生との関わり	先生とのかかわり（指導、サポート、共同作業など）の中で活動できたことが良かった。
概念25	機会の重要性	様々な機会があることが重要である。
概念28	学年を超えた交流	学年を超えた交流の機会があり、そこから学んだ。
概念29	現地に行くことで学ぶ	現地で体験・交流する中で学ぶことがあった。

3. カテゴリーおよびサブ・カテゴリー

概念の内容および相互の関連性を吟味した結果、4つのカテゴリーと2つのサブ・カテゴリーが生成された。各カテゴリーの説明は以下の通りである。なお、【 】はカテゴリー名、< >はサブ・カテゴリー名、「」は概念名を表している。

(1) 【恵まれた学びの環境】

卒業生たちは、高校時代に【恵まれた学びの環境】が有ったことを高く評価している。啓明学院には学びの<豊富な機会>があり、その「機会の重要性」や「活動の楽しさ」を実感している。そこには「他者との関わりから学ぶ」こと、「現地で行くことで学ぶ」こと、「先生との関わり」からの学び、「学年を超えた交流」からの学びなど、<多様な学び方>が存在しており、卒業生たちはそのことを肯定的に捉えている。

(2) 【知識・技能の習得】

卒業生たちは、高校時代に上記のような環境下で「学び方を学ぶ」ことができた、「知らなかったことを学ぶ」ことができた、「伝え方を考える」ことができた、「技術の習得」ができたと実感しており、その後の学習に有効な【知識・技能の習得】ができたと認識している。

(3) 【精神面の向上】

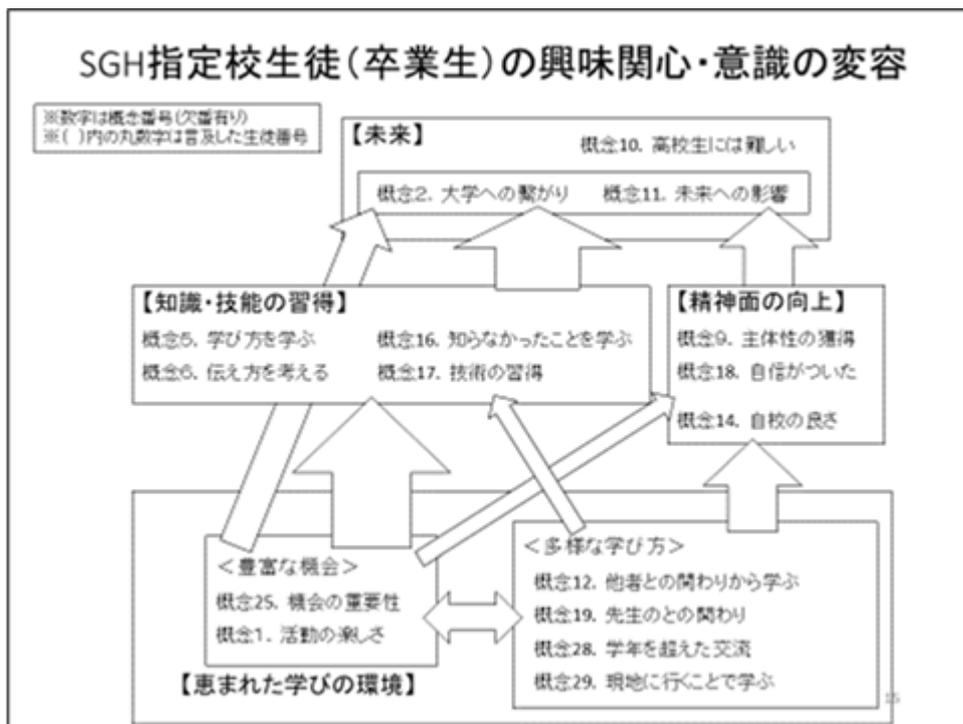
卒業生たちは、高校時代の学びから、【知識・技能の習得】だけでなく、【精神面の向上】も有ったと認識している。様々な活動を通して「自信がついた」り、「主体性の獲得」に至ったと感じている。また卒業後に「自校の良さ」を実感し、誇りに思うようになっている。

(4) 【未来】

卒業生たちは大学型の教育に円滑に適応できており、高校時代の学びの「大学への繋がり」を高く評価している。また、高校時代の諸経験が、進路など「未来への影響」があったという認識もなされている。一方、大学生になって振り返ってみると、高校生には難しかった（が今になって分かる）ことも有ったと考えている。

4. 概念図およびストーリーライン（SGH 指定校生徒（卒業生）の興味関心・意識の変容）

上述のカテゴリー、サブ・カテゴリー、概念を内容の近接性や関連性を考慮しながら図式化すると、下図（概念図）のようになる。



この概念図を説明するストーリーラインは以下の通りである。

- ・SGH に指定され、啓明学院には豊富な学びの機会があり、多様な学びが存在していた。
- ・卒業生たちは、高校時代にそのような学びを通して、知識・技能、学び方、アウトプットの仕方など、多くのことを習得した。
- ・また、卒業生たちは、高校時代の経験を通して、学習面に限らず、主体性や自信など、精神面での向上も実感している。
- ・卒業生たちは、高校時代にこれらを身につけたことで、大学型の学びにスムーズに移行できている。
- ・さらに、SGH の活動は、卒業生たちの進路等にも影響を与えている。

IV. 教職員調査

1. 教職員に対する主な質問項目

教職員（以下「教員」と表記する）に対する主な質問項目は以下の通りである。

- ・SGH に指定されて、生徒に変化は感じられるか。それはどのようなものか。
- ・教員自身に何か変化はあったか。他の教員に何か変化は感じられるか。それはどのようなものか。
- ・SGH に関わってみて良かったこと／得られたものは何か。
- ・SGH に関わって困難を感じたこと／辛かったことは何か。
- ・困難等をどのように克服したか。克服できていないことはあるか。

2. 抽出された概念とその定義

教員の発話からは以下の 27 の概念が抽出された（※欠番があるのは分析の過程で成立しなかったものが有るためである）。概念名とその定義は以下の通りである。

	概念名	概念の定義
概念1	SGHに対する不安	SGHに指定された時に、それに対する不安があった。
概念2	SGHに対する期待	SGHに指定された時に期待感があった。
概念4	生徒の進路への影響	SGHの取り組みが生徒の進路に影響を与えることがあると認識している。
概念5	生徒の積極性・やる気の向上	SGHの取り組みにより生徒たちの積極性ややる気が向上したと感じている。
概念6	相互の理解	SGHに組み込むことでお互い(教員同士、生徒同士、教員・生徒間)の理解が進んだ。
概念7	実施体制上の課題	SGHの実施体制に課題があると感じている。
概念13	時間の不足	SGHの活動と通常業務とをこなす時間が不足している。
概念15	教員自身の成長	SGHの取り組みを通して教員自身も勉強して力量を向上させたいと考えた。
概念17	生徒にとって重要な機会	SGHの様々な取り組みは生徒たちにとって重要な機会だと考えている。
概念18	教員の勉強になる	SGHの取り組みは教員にとっても勉強の機会である。
概念19	生徒の良いところを見る	SGHの取り組みを通して生徒の良いところが見れる。
概念20	教育上の工夫	SGHの取り組みの中で教育上の工夫をしている。
概念22	教育上の行動・意識の変容	SGHの取り組みに影響を受けて教育活動に関する行動や意識の変化がある。
概念23	指導や評価の難しさ	SGHの取り組みの中で指導や評価の難しさを感じる。
概念24	他の教員の協力	SGHの取り組みを行う中で他の教員の協力が助けられる。
概念26	生徒の意識の変化	SGHの取り組みにより生徒の意識の変化を感じている。
概念28	機会の増加	SGHに指定されてから様々な機会が増えている。
概念30	生徒の視野の広がり	SGHの活動を通して生徒の視野の広がりを実感している。
概念31	活動の自己目的化	SGHの活動が自己目的化していることを懸念する。
概念32	生徒の負担	SGHの取り組みにおける生徒たちの負担の大きさを感じている。
概念41	二極化	教員も生徒もSGHへの関わり度合いが二極化している。
概念44	外部との関わり	SGHに指定されたことで外部との関わりが増えたのは良いことだ。
概念46	教員に関わる課題	教員が変化を好まないことがSGH推進の難しさだと認識している。
概念48	SGHは良い機会	SGHは良い機会だと認識している。
概念50	生徒の自律性	SGHに指定されてから生徒たちに自律性がついたと感じている。
概念53	計画性の不十分さ	SGHの取り組みにおいて計画性が不十分で、急な話が出てくることが多い。
概念54	教員の負担増	SGHに指定されてから教員の負担が増したと感じている。

3. カテゴリーおよびサブ・カテゴリー

概念の内容および相互の関連性を吟味した結果、5つのカテゴリーと6つのサブ・カテゴリーが生成された。各カテゴリーの説明は以下の通りである。なお、【 】はカテゴリー名、< >はサブ・カテゴリー名、「 」は概念名を表している。

(1) 【SGH に対する期待と不安】

SGH の指定を受けて、教員の間では「SGH に対する期待」と「SGH に対する不安」があった。

(2) 【SGH の効果】

SGH の指定による様々な「機会の増加」、既存の活動のブラッシュアップや新規活動を通しての「相互の理解」といった【SGH の効果】がみられる。とりわけ生徒たちにとって「SGH は良い機会」だと認識されている。

(3) 【SGH の課題】

教員は、< 運営の難しさ >（「実施体制上の課題」や「計画性の不十分さ」）、< 負担感 >（「時間の不足」、「教員の負担増」、「生徒の負担」）、「教員に関わる課題」、教員や生徒の「二極化」といっ

たいくつかの【SGH の課題】を認識している。また、教育活動の場面では「指導や評価の難しさ」も感じている。

(4) 【生徒への影響】

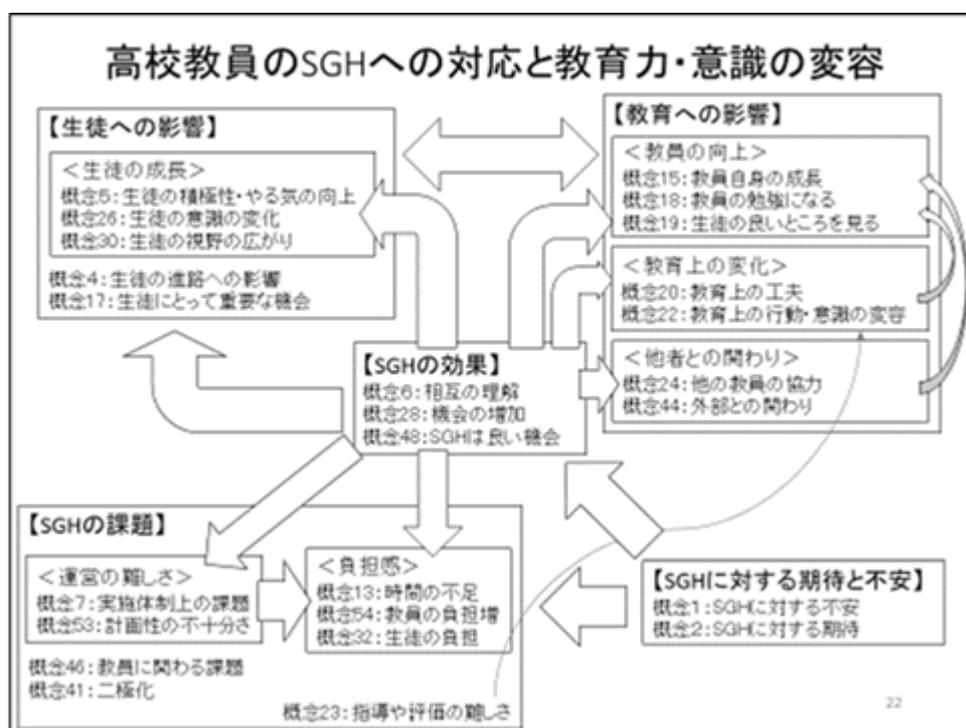
SHG の取り組みは【生徒への影響】があり、「生徒にとって重要な機会」であると教員たちは考えている。とりわけ「生徒の積極性・やる気の向上」、「生徒の意識の変化」、「生徒の視野の広がり」といった＜生徒の成長＞への影響や、「生徒の進路への影響」があると、教員は認識している。

(5) 【教育への影響】

SGH の取り組みは【教育への影響】があると教員たちは考えている。それは「教員の勉強になる」とともに、「生徒の良いところを見る」こともでき、また「教員自身の成長」の必要性を感じることに伴い、＜教員の向上＞に繋がっている。さらに、「教育上の工夫」が行われるようになり、「教育上の行動・意識の変容」も生じており、＜教育上の変化＞が起こっている。これらは＜他者との関わり＞（「他の教員の協力」や「外部との関わり」）から生じることもある。

4. 概念図およびストーリーライン（高校教員のSGH への対応と教育力・意識の変容）

上述のカテゴリー、サブ・カテゴリー、概念を内容の近接性や関連性を考慮しながら図式化すると、下図（概念図）のようになる。



この概念図を説明するストーリーラインは以下の通りである。

- ・教員たちは、SGH に指定されて期待と不安を抱いていた。
- ・SGH が始まると、これまでの教育活動に加えて、様々な学習の機会が増え、それによって相互の理解が進んだ。
- ・その一方で教員たちは、様々な機会の増加により、多忙化や二極化などの課題が生じていると認識している。
- ・教員たちは、それでも多様な学習機会は生徒たちに良い影響があり、その成長を実感している。
- ・さらに、教員が新しい教育方法を取り入れたり、様々な工夫をしたりしており、教育上の効果も生じている。